



お初にお目にかかります

---

2005年11月23日の日記

こんにちは。  
ついにミクシィというものに登録してしまいました。

自分の日記を世に公開するのは初めてなので、  
若干緊張しています。

日記の最高継続記録1週間と、  
始めた今から続けていけるのか先行き不安ではありますが、

人様の目に触れる物ですし  
読んで時間の無駄だだと思われぬように、  
なるべく面白いことを書きたいと思います。

とりあえず私は誰なのかわからないと思うので、  
今までの経歴を書いてみましょう

中学・・・吹奏楽部→1ヶ月で退部  
のち帰宅部

高校・・・漫画研究部  
同じ部員の友人と揉める→絶交する→帰宅部

大学・・・落語研究部(一応4年やる)

大学卒業後  
携帯電話屋店員約3年  
今年モバイルコンテンツ業界に転職

一体何がしたいんでしょうか。  
全く一貫性がありません。

計画性もなく生きている結果がこれです。  
人に自慢できることといえば、  
NEETでもなく一応正社員としておそらく真面目に働いていることと、  
たまに滞納しつつも税金は払っていること、  
犯罪歴がない、ってことくらいだと思います。

こんな私ですが、よろしくお願ひします。

## シャープの女

---

2005年11月27日の日記

私は東京にある会社まで電車通勤しています。  
通勤時間が朝のラッシュにあたるのですが、  
毎朝満員電車にもまれるのは勘弁なので、  
席に座る為に30分早く家を出ています。

1時間電車に乗っているので、  
降りる駅までは寝て過ごしています。  
ただ、乗り過ごすといけませんので、  
携帯電話のアラームをセットして、  
Gパンのポケットに入れてあります。  
降りる駅の近くになると携帯のバイブで起きるので安心です。

それと同じことをしている女性が、  
毎朝私と同じ車両にいます。  
年齢は27、8くらいでしょうか、  
いつも私の隣の隣くらいに座り、  
やはり携帯のアラームをセットして寝ていらっしゃいます。

ただ、私と彼女で決定的に違うことがあります。

私は携帯をマナーモードにしていますが、  
奴はマナーにしていないのです。

私は携帯の振動で起きますが、  
彼女は携帯のアラーム音で起きるのです。

しかも大音量。

明らかに他の人に迷惑だと思いますが、  
彼女は何食わぬ顔で電車を降りて行きます。

私はその女の事を「シャープの女」と呼んでいます。

何故かというとな彼女の使っている携帯がドコモのSH251iであり、

伊丹十三監督のマルサの女にかけてるからってそんなことはどうでもいいんだ糞が一

シャープの女は私が降りる駅の二つ手前の駅で降りる為、  
私は自分が起きる予定の時間よりも早く、  
シャープの女の着メロで起きてしまいます。

私はギリギリの時間まで寝ていたいのです。

何故彼女は携帯をマナーにしないのでしょうか。

「携帯電話はマナーモードにし、通話はお控えください」という  
アナウンスが聞こえていないのでしょうか。  
他に寝ている人がいるとは思わないのでしょうか。

快適な電車生活を送る為に早く家を出ている私が、  
何故いい年して世の中のルールも守れない女に  
こんな思いをさせられなければならないのでしょうか。

そんなある日シャープの女が私の隣に座りました。

その日も私が気持ちよく寝ているときに大音量の森のくまさんが流れました。

私はこっちは今まで寝てたのにお前の携帯の音で起こされたんだぜ？

といった顔をして女の方を見ました。

しかし、女は顔色一つ変えずに降りていったのです！

私の中のコスモが燃えました。

奴に正義の鉄槌を下さなければならない...

明日だ。明日私は奴にはっきりと言う。

マナーモードにしろと。

電車の通路のど真ん中に座って

だべっている高校生には注意できない私だが、

今なら言える。

神よ、我に力を与えたまえ。

そんなことを考えているときでした。

私のポケットの携帯電話から、大音量の着メロが流れました。

その日、マナーモードにするのを忘れていました。

奴に正義の鉄槌を下す資格は私にはない...

私は次の日から、一本遅い電車に乗っています。

## 手コッキー伝説～序章～

---

2005年11月29日の日記

私の数少ない友人の1人に、  
前職で後輩だったN村君という人がいます。

彼との出逢いは1年前くらいでしょうか。

当時働いていた携帯電話の販売代理店は労働環境の悪さゆえ  
スタッフの回転率が高く、常に人不足。  
社員の休みを削って何とか店を回しているような状況でした。

その上今どき携帯屋なんて  
人材募集してもあんまり応募がなく、  
応募があったとしてもろくな人材が来ず  
(私に言われたくないだろうが、  
私レベルの人間でもそう思うんだからしょうがない)  
たまにまともな人が来ても恐ろしい労働環境に  
すぐに辞めていってしまいました。

私も月の休みが3日という日もあり、  
バイトに平謝りして休みを削ってもらったりしてました。

そんな慢性人不足な状況だったので、  
N村君が採用されたのもしょうがないような気がしました。

N村君が入社してきたのは、春だったように思います。  
私のいたグループの後輩としてお店に配属されました。

彼の第一印象は明るくハキハキした青年、といった感じで、  
顔立ちも整っていました。

しかし、まともなのはツラだけでした。

黙っていれば、好青年なのです。  
黙っていれば。

彼の口癖は「俺が」でした。

口を開けば

「俺ってこうなんですよ～」

「俺はこう思いますね～」

「俺はこれが好きですね～」

「俺の接客は～」

「俺の弟が～」

「俺が」

「俺の」

「俺ならば」

「俺する時」

「俺...しつこいからやめます

オレオレ詐欺はこいつが発祥なんじゃないかと思うくらい  
「オレオレオレオレ」言っていました。

彼は相手の話を一切聞きません。

私「ドコモのこの機種の件なんだけど、  
予約枠残り少ないので、予約を取るときは本社に枠の確認をしてもらえるかな」

N「あ～それで俺が昨日売ったお客さんの件なんですが、いや～すごい(略

私「(今の話聞いていたのかな...)」

みんなで集まって話をしているときに  
全く関係のない俺の話を  
何の脈絡もなくいきなり話し出すなど、



彼の変化球は上司、後輩関係なく繰り出されました。  
空気の読めなさでは右に出る者はいませんでした。  
(私に言われたくないだろうが、  
私レベルの人間でもそう思うんだからしょうがない)

そんな彼がお客様とのコミュニケーションが命の接客業についての訳ですから、  
問題が起きない訳がありません。

彼が起こした「ドラクエ事件」「覆面事件」等については、  
次回以降お話ししようと思います。

## 手コッキー少年の事件簿第2話

---

2005年11月30日の日記

携帯電話屋の店員さんは本当に大変だと思います。  
たくさん機種がある上に、  
会社によって料金プランもバラバラですし、  
その料金プランもどんどん新しくなっています。

たまに私のような携帯オタもやってきますが、  
基本的にお客様は素人ですから、  
お店で店員の話聞きながら機種を決める方が殆どです。  
なので、店員の案内がかなり重要になってくる訳です。

携帯も最新機種にもなると3万越えするものもありますし、  
そうちょくちょく買えるものではありません。

一生に一度の買い物をしたら震度5で倒壊すると言われた...  
そのショックに比べればうんこのようなレベルかもしれませんが、  
(※ちょうどこの日記を書いていた頃、姉齒事件真っ盛りだった)

せっかく高いお金を出して携帯を買ったのに  
それが自分の望むものではなかったら、  
誰だって怒ると思います。

それを踏まえて友人のN村君の話ですが、  
その日N村君が入っていた携帯電話店にやってきたのは、  
ドコモで機種変更をお求めのお客様でした。

「携帯を新しいのにしたいんですが」

当時の最新機種というと、  
今や風前の灯火の”ムーバ505iシリーズ”でした。

カメラの最大画素数130万画素で大騒ぎしていました。  
パケホーダイなんて夢のようなサービスはありませんでした。

「それでしたらこちらの505シリーズが

最新機種になりますのでオススメです！」

N村君は505シリーズをすすめました。  
何故なら、在庫があったからです。

他人より自分の考えが優先なので、  
N村君が勧める機種は  
自分の処分したい在庫>>>>>>>>お客様の希望 です。

ところでこのお客様には、  
携帯を買い換えるにあたり、条件がありました。

その条件とは、

新しい携帯でドラクエをやりたい。

ということでした

その頃確かドコモの携帯でドラクエのアプリが始まったので、  
ちょっと話題になっていたと思います。

「この機種はドラクエ出来るの？」

N村君は505シリーズがドラクエに対応しているかわかりませんでした。

<さて、どうする？>

- 1 「お客様、間違ったご案内をするとご迷惑をおかけしますので、  
只今お調べいたします。少々お待ちくださいませ。」
- 2 調べるのがめんどくさいので  
「出来ると思いますよ」

N村君は迷わず2番を選択しました。  
お客様は勧められるまま505iシリーズに機種変更し、  
最新機種を手にし満足げにお帰りになりました。

勿論、505シリーズはドラクエに対応していませんでした。

ドラクエの使えない505をお買い上げになられたお客様は、  
数日後カンカンのご様子で店にいらっしゃいました。

「ドラクエができるって言うから買ったのにできないじゃないか。  
どうしてくれるんだ」

さあ大変です。クレームになってしまいました。

しかし、クレームというのはチャンスでもあるのです。

誠心誠意対応をすれば、逆にそのお客様の信頼を得て、  
その後その店の固定ファンになってくれる、ということもあるのです。  
クレームのお客様にいかに対応するかが、  
今後の店の売上を左右するのです。

さあ、どうするN村！

次の瞬間彼はこう言いました。

「そのうち出来るようになるんじゃないですかね」

・・・その後の展開としてはお客様の最終兵器「責任者を出せ」が発動、  
色々と話し合いの結果、買ってから数日経っており  
別機種への無償交換は不可能、ということで、  
短期機種変更代3万円強をN村が支払うということで和解。  
N村君は別の店に移動になっていました。

今考えると、3万払わせる会社もすごいなあと思います。

つづく

せめて、人間らしく

---

2005年12月01日の日記

何しろ地獄のような人不足なので、  
N村君ですら、入社半年にもなると店舗責任者になっていました。  
(私のようなレベルでもなれたんだぜ・・・)

責任者になったことで、  
一応彼なりに責任感が出てきたようでした。

部下の教育にも熱心で、  
アルバイトに毎日自分の販売論を熱弁し、  
何人も辞めさせていました。

さて、どの業界でもあるのかわかりませんが、  
お店には時々覆面調査員が来て、  
接客態度や店作り、適切な価格表示がされているか、  
などをチェックされました。

調査員の派遣元は色々ですが、  
携帯電話会社が遣わした調査員であったり、  
店舗がテナントとして入っているスーパーの調査員であったりしました。

そこで下手な接客をすると後から注意を受けます。  
最初は注意ですみませんが、  
余りにも回数が多いと下手すりゃ取引停止、  
なんて事もありえます。

私共にとってはとても厄介な存在でした。

なんて前フリをすると  
N村が調査員の前で奇行をはたらいたのだろうと  
お思いになるかもしれませんが、そうではありませんでした

ある日、N村含む私たち店舗責任者は、  
留守をバイトさんに任せて本社で会議をしていました。

しかし運の悪いことにその時、  
N村君の店に覆面調査員がきてしまったのです。

N村君の部下だからわかりませんが、  
その時対応をしたスタッフは、  
客を装った調査員にとっても愛想のない対応をしたようです。

早速会議中本社にお叱りの電話がかかってきました。  
連絡を受けた上司はご立腹の様相で、N村君に

「お前の所に覆面調査員がきて接客注意されたぞ！  
すぐに店に電話してバイトにどんな接客をしたのか状況を確認しろ！」

と皆の前でまくしたてました。

厳しい面持ちで必死にダイヤルをするN村君。  
見守る他の社員。  
私は会議がとてだるく、  
「さらしもんか、かわいそーに」  
くらいにしか思ってませんでした。  
しかし次の瞬間、

「お疲れさま、N村です！  
あのさ、今日店にマスクをかぶったお客様が来なかった?!」

( °A° ) ( °A° ) ( °A° )

時が一瞬止まりました。

マスク・・・・・・・・

覆面！！！！

彼は、覆面調査員をその字面のままとらえていました。

そんな客が来たら本社に電話が来る前に  
まずポリスに電話です。

一瞬の間の後、社員全員がその場に倒れました。腹を抱えて。

ご立腹だった上司は、あまりの衝撃に動揺しながらも、  
何とかその電話を止めさせようと、

「(違う！違う！)」  
とジェスチャーでN村君に訴えました。

周囲の異変と、上司が必死に両腕で×を作るさまに気付いた彼は、  
あわてて訂正しました、

「ごめん間違えた！  
マスクじゃなくて着ぐるみを着たお客さんが来なかった?!」

その後は会議になりませんでした。

着ぐるみを着た人が「携帯電話ください」なんて来た日には、  
そりゃ冷たい対応もするでしょう。

後で聞いた話によると、彼は覆面パトカーは知っていたそうです。  
それでいて何故覆面調査員が理解できなかったのか、  
未だに謎です。

私はすっかりN村君が気に入り、  
携帯屋を辞めてからも時々飲みに行きいじって遊びましたが  
それで特に恋愛感情が湧くことはありませんでした。

最近はすっかり疎遠になっていますが、  
彼はまだ生きているのでしょうか。

あと、この日記のタイトルになっていた「手コッキー」は  
N村君につけられたあだ名でした。

最後の方はコッキーとか呼ばれていました。

しかし由来が未だに思い出せません(じゃあ書くなよ...)



## 負け犬の遠吠え

---

2005年12月08日の日記

一応私にも女友達というものが存在します。

いやはや、この年にもなると  
飲みの席での女同士の話題といえば、

「どうするよ、今後の人生」

これで持ち切りな気がします。

「今の彼氏とこのままずるずる付き合っただけで結婚しちゃうのかなァ...」

「こないだ彼氏の実家に行ったんだけどさあ、  
向こうの親と合わなそうなんだ」

「こないだ友達の結婚式に行ったんだけどさ～  
超感動したよ～私も結婚しようかな」

「相手いないじゃん～(笑)」

私は、そんな話より正直

「BLOOD+ってあんだけ盛り上げた割には超つまんないよね。  
押井監督は何やってんの？」

みたいな話がしたいのです。

いつの間に、みんな大人の階段を上ってしまったのでしょうか。

大人の階段を上りたくないんですけど、拒否できますか？

(こども電話相談室相談員)

「あなたあと一ヶ月くらいで26ですよ。

いつまでも現実逃避してちゃ駄目だよ。

大体こんな所に電話してくる年じゃないでしょ。」

---

## 解説

この日記を書いた頃、TVアニメ「BLOOD+」が放送開始になり、

このアニメの基になった短編映画「BLOOD THE LAST VAMPIRE」のファンだった私は

その作品とのあまりの差に愕然とし、その思いを誰かに伝えたかったのではないのでしょうか。

4年後、私は何とか結婚しました。

## 未知との遭遇

---

2005年12月10日の日記

今私は1人で会社にいる。

課長もいない。

私1人だ。

ははは

ははははは

はははははははははは！

いいか、誰もいないことをいいことに、  
これから悪いことをしてやる！

変態野郎の恐ろしさを思い知れ！

## 未知との遭遇 2

---

2005年12月10日の日記



テスト用端末を9の字に並べてやった・・・

明日出勤した人が発見したら  
あまりの異常さに恐れおののくだろう・・・

はははは

ははははははははははははは

仕事するか・・・・・・・・・・

## ルビーの指輪

---

2005年12月12日の日記

私は一人で映画館に行くのが大好きです。

家の裏にサティができてからは、  
サティの中のワーナーマイカルによく行くようになりました。

特に平日のレイトショーは1200円で見られますし、  
空いているので気に入っています。

ワーナーマイカルシネマズは、いわゆる「シネコン」というやつです。

シネコンというのは、  
一つの建物の中にスクリーンが複数ある映画館のことで、  
最近どんどん増えているみたいです。  
最新映画はそこに行けばほとんど見られます。  
見たい映画のチケットを購入し、  
入り口で係員に渡したあとはそれぞれの部屋に入って映画を見る形です。

2、3年前くらいの話です。  
北野武監督の「Dolls」が見たくて、ワーナーマイカルに行きました。

チケット購入で並ぶと、  
目の前のカップルもDollosのチケットを買っていました。  
レイトショーとはいえ、まだ公開されてまもなくだったので、  
結構混んでるんだらうなー、と思いました。  
ゆっくり見たい自分としては不安でした。

しかし部屋に入ると、結構空いていて安心しました。  
菅野美穂とか出てたので、若い客が多いのかと思ったら、  
意外とおじさんおばさんが多かったように思います。

開始時間になったので、携帯の電源を落とし、上映を待ちました。

しかし、時間を過ぎても映画は始まりませんでした。

こんなことは初めてでした。  
時間を勘違いしていたのか？と思いチケットを見直しましたが、  
時間は合っていました。

何か問題があって上映時間が遅れているのだろうか。  
しかし特にそんなアナウンスもありません。

おいおい何だよ、遅れるなら一言言ってくれよ、と思っているうちに、  
5分遅れくらいで予告編の上映が始まりました。  
まあ始まったからいいか。  
とりあえずそのまま見始めました。

普通だったら遅れている時点でおかしいし、  
もっと疑問に思うべきなのですが、  
何しろDollsは公開前から結構楽しみにしていた映画でした。

その時は仕事が忙しくてなかなか見に行けず、  
やっと行くことが出来たので、  
とにかく早く観たい、という気持ちが先行していました。  
さらに開始時間が遅れたので、早くしてくれよ、  
という気持ちでした。

西島秀俊も結構好きだったし、  
今回の作品は映像美にこだわったとのこと。  
どんな映画なんだろう・・・

わくわくしている私の目の前に現れたのは、  
大画面に映し出された寺尾聰の顔でした。

寺尾聰・・・・・・・・・・

たしか、寺尾聰は出ていなかったはず・・・・・・・・  
いや、もしかしたら、脇役で出ていたのかも・・  
しかし最初から出るかな・・・

さらにいつまで経っても菅野美穂も西島秀俊も出てきません。

田舎の山の風景が延々と続きます。確かに映像美といえば映像美ですが・・・  
そのあと、映画のタイトルが表示されました。

「阿弥陀堂だより」

違うよね・・・・・・・・

入る部屋を間違えたのに気付いたのは数秒後でした。  
そりゃアナウンスも流れないし、  
ガラガラだし、周りはジジイババアばっかだよな・・・

しかし予告編もしっかり観て、タイトルまで出たあとです。  
今からDollsの部屋に行ったとしても、どう考えても間に合いません。  
自分のアホぶりに一瞬死を考えましたが、  
しょうがないので、そのまま見ることにしました。

結果、私は阿弥陀堂だよりに感動して、  
号泣しながら映画館を出ました。

寺尾聰が抱かれない男性俳優ランキングに入りました。

もし私が入る部屋を間違えなかったら、  
阿弥陀堂だよりは一生見なかったと思います。

Dollsは未だに見ていませんが、良かったと思っています。

## 平塚のサキちゃん 第1回

---

2006年03月02～04日の日記

今日は大学時代の思い出を書こうと思います。

私は大学に入るまではアニメとマンガが好きで、  
もちろん男性経験など皆無であり、  
ビジュアル的には「女版電車男」といった感じの気持ち悪い女であり、  
人との通常会話もままならないくらいの挙動不審な人間でした。

自宅にいる時は自分の部屋に籠もり、  
絵を描きながらラジオを聴いていました。

深夜ラジオを聴いて爆笑しそうになるのを、  
親に怒られないように必死でこらえている時間が幸せでした。

女子高だったので男性との接点は学校の先生と父親くらいでした。  
同級生が彼氏や、先生への恋の話をしている時  
私は、碇ゲンドウがかっこいいと思っていました。

漫画家かアニメーターを目指していたので、  
受験時代は絵の学校に通い、美大を志願しました。

ただ有名な美大に現役で合格するのは至難の業で、  
受かったのは滑り止めで受験した総合大学の教養学部でした。

その教養学部の中に芸術学科があったので、  
浪人もめんどくさくて、そこでいいや、みたいな感じで入りました。

入学式の日には渡されたサークル勧誘ビラの束の中に  
知らないうちに紛れ込んでいたのがこの落語研究部のビラでした。





早速説明会に足を運ぶと、先輩たちがコントをやっていました。  
すごく笑いました。

「君、家はどこら辺なの？」「学部は？」どんどん質問され、  
そのまま、大学近くの居酒屋に連れていかれました。  
初めての飲み会でした。

酒が飲めなかったのでオレンジジュースを飲んでいましたが  
先輩がちやほやしてくれるので悪い気はしません。

コントを行う、楽しいサークルなんだと思いました。

最初の1ヶ月くらいは・・・

「これからお前等に小喃を覚えてもらう！」

ある日部会に行くと、先輩がいきなり大声で怒鳴り、  
教室の黒板に文字を書き始めました。

「おい源さん」

おい源さん

何だい

夕べお前さんに吊ってもらったあの棚な

ああ

あれ、おっこっちゃったよ

おっこった？そんなはずはねえんだがなあ、お前、何かのつけたんじゃねえのかい

意味が分かりませんでした。

これが、私が生まれて初めて覚えた小喃でした。

つづく

## 平塚のサキちゃん 第2回

---

2006年03月02～04日の日記

私は昔から人前でしゃべることが本当に苦手で、授業でさされて発言する時ですら顔が真っ赤になるくらいでした。なので、落語なんてやるつもりはさらさらありませんでした。面白い人がコントやって、私は裏方だと思ってました。

「この小噺を全員ノートにメモして覚えてくるように！  
1週間後に試験を行う！」

「はい！」

とても「嫌です」と言える雰囲気ではありませんでした。

コントをやる楽しい飲みサークル、というのは新入生勧誘の為の呼び水であり、落語研究部の本当の姿は、約40年の歴史を誇る古典芸能を本気で学ぶ体育会系(風)の団体でした。

コントをやるのは1年の中で新入生勧誘の時だけあり、あとは全て扇子とてぬぐいを持って古典落語の練習でした。

それから、先輩が来たら立って大声で挨拶  
先輩よりも先に箸を割らない、後輩が率先して走る  
ビールのラベルは上にして注ぐ  
など、先輩への礼儀を教わりました。

気がついたら小話を覚え、あれよあれよと一つ目、二つ目、とネタを覚えていきました。全員やってるから、私だけやらない訳にはいきません。

初めて高座に上がった時は、緊張がピークに達して、ネタがぶっ飛んで頭が真っ白になりました。先輩が舞台裏で台本を読み上げてくれて何とか続けました。

落語会が開催される際は会場前で呼び込みです。  
道を通る全くの他人に

「落語見ていきませんかぁ！」と声をかける(ほとんどナンパ)

大きな声を出さないと、  
反省会で先輩に、机蹴りながら怒鳴られる・・・  
何度も辞めようと思いましたが、辞める勇気がありませんでした。

年に2回行われる合宿では、山奥の合宿所に一週間籠もり、  
時計や携帯、財布を没収され、  
1日6時間くらい正座したまま落語を練習し、  
夜は夜で落語に関するミーティングを5時間くらいやりました。  
人格改造セミナーかと思いました。

という訳で、根暗だった私もその状況で3年も過ごせば、  
無理やり人格矯正されて、  
別人のように人としゃべるようになっていました。

同期が落語で笑いを取っていたら嫉妬するくらい、  
小さなプライドも芽生えていました。

結局4年間在籍しました。  
10人くらいいた同期は最終的に3人になっていました。  
何だかんだで何かを最後までやるのは初めてでした。

今思えば、あそこで落研に入っていなかったら、  
新入生勧誘のピラをもらっていなかったら、  
私は人と目を見て会話をすることもできなかつたし、  
就職することもできなかつたのではないのでしょうか。

ありがとう落研、いい薬です。

我が子が家に引きこもっていてお悩みのそこのお父さんお母さん、  
お子さんを落語研究部に入れましょう。  
明るくなるかもしれません（保証はしません）。

つづく